

令和5年度「全国学力・学習状況調査」の結果 －分析から見てきた成果・課題と今後の取組について－

区 名	城東区
学 校 名	大阪市立城東小学校
学校長名	松本 康之

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和5年4月18日（火）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

大阪市教育局では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育局の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数

(2) 質問紙調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・学校では、第6学年 61 名

令和5年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

【国語】

平均正答率において、全国・大阪市平均をどちらも1pt程度上回った。領域別にみると、「話すこと・聞くこと」においては、全国・大阪市平均を大幅に上回った。また、「読む」においても若干ではあるが上回った。一方、「書く」では課題がみられる結果となった。

【算数】

平均正答率において、全国・大阪市平均をどちらも1pt程度下回った。領域別にみると、「図形」においては、全国・大阪市を2pts程度上回った。一方、「数と計算」では課題がみられる結果となった。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

【国語】

同一集団に対してのここ3年間の大阪市経年調査の結果から、領域「読む」に課題を感じていた。しかし、今回の学力・学習状況調査の結果では、「読む」ことにおける肯定的な伸びが確認できた。これまで本校で取り組んできた、物語文や説明文を取り扱う単元での指導アプローチの成果が感じられる。一方、領域「書く」に課題があることが伺える。

【算数】

領域「図形」において、実物を見たり触ったりすることや、デジタル教材を活用して視覚的に理解を促すことを大切にする指導アプローチの成果が感じられる。一方、領域「数と計算」においては課題があることが伺える。

質問紙調査より

本校では数年前から、人権教育の充実を学校の軸の1つとし、児童の自尊感情・自己肯定感を高めることを目標としてきた。ソーシャルスキル・トレーニング（SST）を取り入れ、児童や学年の実態に合わせつつ、系統的に実践に取り組んでおり、その成果が伺える。

また、児童の自主学習力（自己調整力）の向上にも力を入れてきた。それに伴って、自己理解が深まり、そのことが将来に向けた考えを広げたり深めたりすることにつながっていくと考える。

一方、児童の読書習慣の定着に課題を感じている。

今後の取組(アクションプラン)

今回やこれまでの学力・学習状況調査の結果を踏まえて、各教科、また教科の枠を越えて教科横断的に教育改善に取り組むことは大変重要なことであると認識している。しかし、各教科の専門的な領域1つ1つにアプローチするだけではなく、教員における授業全体に対する意識改革も必要である。

児童に1人1台端末（PC）が完備され、学校でのインターネット環境も整えられてきた。黒板とチョークを使った教員から児童への一方通行の授業から、児童が課題を自分事として捉え、主体的に調べたり考えたりする、また児童と児童とが密につながる、ICTを活かした令和の教育スタイルを探っていきたい。そのために、教員の教材研究の時間を確保するための働き方改革を進め、時に教員がファシリテーターの役割を担うサポートの仕方の研修を行っていく。

もちろん、国語科では領域「書く」、算数科では領域「数と計算」に焦点をあてた指導改善を行い、またこれまで本校が大切にしてきた教育も継続しながら、ニュースタイルを模索していく。